

DRAMA かながわ 77

神奈川県演劇連盟事務局：神奈川県横須賀市米が浜通1-3 Tel.045-263-4472



第16回 神奈川演劇博覧会

2019年3月15日(金)～17日(日)
神奈川県立青少年センター2階 HIKARI

文：劇団「無題」 穂村一彦

第16回神奈川演劇博覧会を振り返って

第16回神奈川演劇博覧会（以下「演博」）が今年3月15日（金）～17日（日）で開催され終了した。私は公演団体としては5回目、そして実行委員会としては初めての参加であった。今まではただただ自分たちの劇のことで必死だったが、今回微力ながら運営側として働くことで、演博というものが実に多くの人たちの力によって開催されていることを知った。今回舞台裏の視点から学んだことと、今後の演博の未来

についての思いを少々書かせていただく。

■ リニューアルホール

神奈川県立青少年センター多目的プラザは、演劇・ダンス等専門スペース「スタジオHIKARI」として新しく生まれ変わった。今年3月、ちょうど演博開催の直前のことである。工事期間中は不安な気持ちもあった。何度も使ったことのあるホールがどのように変わるのか？それによって設営はどう変わるのか？しかし工事が終わり、参加団体全員で見学することで、

不安は一掃された。床・壁、全面が黒塗りにされたホールは、まさに演劇空間というのにふさわしく、日常生活とは隔絶された別世界であった。演博ではこの黒い床を活かし、平台を敷かない舞台を作った。初めての試みであったが、皆で試行錯誤し、無事に公演は成功した。次回からは今回の経験を活かし、よりスムーズな設営ができるだろう。

■ 投げ銭制

こちらでも今回初めての試みであった。「投げ銭制」の導入である。投げ銭箱を受付に置き、お客様から好きな劇団へご祝儀を贈れるようにした。初めての制度に不安もあったが、想像以上に観客の皆様は温かく、大いに活用して頂けたようである。お気遣い大変ありがたく、この場を借りて御礼申し上げたい。

演博は演劇の敷居を低くして演劇を広めようという理念で開催されるイベントである。お客様にとっても、そして公演劇団にとっても参加しやすいものとしたい。単独公演なら設営や照明などさまざまな専門知識と経験が必要になるが、演博では実行委員会の依頼した舞台監督、照明スタッフによるサポートがあり、経験の浅い学生団体も参加しやすい体制を作り上げている。しかし学生にとっては参加費の負担は大きく、それはかねてからの懸念事項であった。どうにか負担を軽減できないかと考えられたのが今回の投げ銭制であった。

参加団体からの評判も良く、演博はより参加しやすいイベントとなったようだ。次回以降も継続してほしいという声も多かった。ぜひ今後とも継続してほしい。

■ さまざまな人々との関わり

演劇と一言でいってもいろいろな形がある。演博は参加条件を「神奈川県内で活動」という一点のみにし



て、さまざまなタイプの演劇が活躍できるフィールドとなってきた。

今回の参加劇団は11団体。一人芝居、パントマイムの無言劇、落語アレンジ等、幅広い表現を観ることができた。団体についても、学生劇団、今回が旗揚げ公演である生まれたばかりの劇団、30年以上活動している劇団と、実に多くの方々が集まった。

普段は交流のない皆様が「演劇」という接点で知り合い、交流できることは素晴らしいことである。今後も演博は、劇団と劇団、劇団と観客、劇団と町を結ぶ、出会いの場として生き続けることを願っている。

第十六回 神奈川県内演劇博覧会

2019年3月15日(金)/16日(土)/17日(日)

会場: 神奈川県立青少年センター2階 HIKARI
主催: 神奈川県演劇連盟 神奈川県演劇博覧会実行委員会
共催: 神奈川県立青少年センター
問い合わせ: 神奈川県演劇連盟 080-5659-2700
E-mail: info@kenenren.org
URL: <http://kenenren.org/> **入場無料・出入り自由!**

3/17 日曜日

劇団「あまのこ」
 大正ロマン 恋の嵐
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

3/16 土曜日

劇団「あまのこ」
 大正ロマン 恋の嵐
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

3/15 金曜日

劇団「あまのこ」
 大正ロマン 恋の嵐
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

劇団「アリス」
 アリスの冒険
 作: 藤村 操 演出: 藤村 操

第16回 神奈川演劇博覧会

文：演劇博覧会実行委員：穂村一彦（劇団「無題」）／協力：鳴海悦子（劇団かに座）

■ 犬猿も仲

登場人物も設定もバラバラの短編集、のはずなのに、共通する切なさを感じる雰囲気と詩を読んでいるような独特のセリフ回しに、一つの長編を観たような気分になりました。舞台はどれも現代日本ですが、まるで異世界のような空気感に包まれていました。

■ 劇団砂からマカロン

二卵性双子の女芸人の物語。息の合った演技で、ずっと一緒に生活してきた双子という説得力がありました。表舞台の明るく楽しいコントシーンと、舞台裏の切羽詰まった雰囲気、二つのギャップがメリハリを生む、目の離せないストーリーでした。

■ 劇団ホシ灯リ

人間失格。読んだことはなくても、大体の方は知っているであろう題名ですね。1人芝居で40分間。人間失格の、あの何とも言えない鉛のような重さなど良く出ていました。人間の弱さとか儂さとか脆さ。汚い部分をぶつけられるようなお話なので個人的に観た後に心が荒みます。（褒め言葉です）

■ ヨコハマ☆ファンキー・モンキー・マン!!!

病院の手術室前で起きるワンシチュエーションの二人会話劇。限定された場所、人数でありながら、登場人物二人の心情が変化していく様子が面白く、退屈することなく観ることができました。会話テンポの変化、動と静の使い分けがうまく、演技にリアリティを生み出していました。

■ 劇団「無題」

「キドアイラク」。何度かこの劇団のお芝居は観ていますが、演出を外の人にやってもらうという初の試みのお芝居で雰囲気がいつもと違った芝居作りとなっていました。感情を題材にしたお話は、表現をする役者の端くれとしてはちょっと考えさせられるところもあり。本当に凄いなと思いました。

■ MMT パントマイム

台詞がないのに、そこで何を話しているか思ってい

るか。不思議とちゃんと伝わるのです。身体1つであそこまで表現できるのは、圧巻でした。兵隊さんのお人形を支えに、賢明に生きる子供たちが印象的でした。特に兵隊さんは、いつ瞬きしているのか。人形にしか見えず、そこを凄く気にしながら見てしまいました。

■ 劇団天の河神社

荒々しさもあるけれど、芝居熱が全面に伝わってくる劇団です。突っ込みどころの多い郵便局のお話ですが、最後はちょっとホロリとする内容でした。ギターや大きな音響など、演出も面白かったです。

■ 劇団横濱にゆうくりあ

昭和の前半頃であろうお話。夢見て上京してきた女の子と、出会ったトラック運転手のおじさんとのお話。そこにあるのは恋とも愛とも違う、何て表現すれば正しいのかわからない、絆で結ばれた2人のお話でした。自転車の車輪を車のハンドルに見立てたりしていて、なるほど。と思う小道具等も良かったです。

■ プラスティックな月

落語を元にして演劇という世界を展開する劇団。とにかく笑いっぱなしです。ストーリーやテンポ・落とし所も良く出来ていて、素直に楽しめると思います。観た後は恐らく全員、ファミリーマートの入店音が離れなくなるに違いないです。

■ 劇団 Clover

三姉妹のホームコメディ。高校演劇でよく上演される楽静氏の脚本を、勢いのある演出と演技で見事に表現していました。三人の息の合った演技から、三姉妹の絶妙な仲の良さを感じ取れました。舞台装置のコタツがとてもうまく使われていて印象に残りました。

■ 劇団カレーライス

昔の外国、オリエント急行が舞台の物語。重厚な文学小説のような設定でありながら、軽快な会話テンポとコメディ要素により、親しみやすい劇でした。一癖も二癖もある登場人物たちが生き生きしてとても良かったです。

TAK IN KAAT

2019年3月27日～31日 於:KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ
文: 緑慎一郎 演劇プロデュース「螺旋階段」

劇団820製作所『森が燃える』 作・演出: 波田野淳紘



劇団スクランブル『Leave!』 作・演出: 坪井俊樹



演劇プロデュース『螺旋階段』『静的コンプレックス』 作・演出: 緑慎一郎



神奈川芸術劇場 × 神奈川県演劇連盟のTAK in KAATが九年目を迎えました。初年度から関わらせて頂いているこの企画に今回はどのようなアプローチでチャレンジしていくかがとても重要だと考えていました。アマチュア劇団として神奈川芸術劇場で公演を普段通りに行うことだけがTAK in KAATではなく、様々な形でチャレンジ出来るということが重要になっていくのではないかと。そのチャレンジこそが次の十年目へのTAK in KAATへ繋がっていくのではないかと。とはいえ、この企画に再び関わらせていただくには少し準備に時間がなかったことは事実でとて

も苦労しました。この時、神奈川県演劇連盟の大きな事業、神奈川県演劇連盟合同公演と神奈川演劇博覧会が行われていてそのすぐ後にTAK in KAATという流れでした。TAK in KAATの新しい企画とは何なのか、それを探すところから始まりました。企画会議で様々な案がある中、何度となく関わらせて頂いた劇王神奈川とかもめ短編演劇祭のような短編を各団体が上演形式にすることに決めました。参加団体は「劇団820製作所」、「劇団スクランブル」、「演劇プロデュース『螺旋階段』」。この企画に参加した三団体に大まかなルールを決めました。「作品の時間は30分

程度」、「同じ舞台装置を使用する」、「同じテーマに基づいて創作する」。新しい企画というには少し弱いルールですが次に繋がる試みとしてはとても刺激的な企画となりました。

テーマは「ラブホテル」、舞台にはベッドやテーブル、風呂桶が設置され空中にはベッドのオブジェが吊られることになりました。作品が出来上がる前に舞台装置が決まっているわけですから作家にとってはある程度の制約がかかる中、各団体がオリジナル作品を創作しました。顔合わせから小屋入りまでは別々に稽古をし、お互いの作品は全くわからないなかでしっかりと団体の個性を存分に出しました。劇団820製作所『森が燃える』作・演出 波田野淳紘（劇団820製作所）、劇団スクランブル『Leave!』作・演出 坪井俊樹（劇団スクランブル）、演劇プロデュース『螺旋階段』『静的コンプレックス』作・演出 緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）、

三作品で「pinky」という作品。新しい企画とは何なのか、次に繋がる企画とは何なのかと模索したところから始まった企画としては大成功だったと思います。これからもTAK in KAATが神奈川県演劇連盟が届ける刺激的な企画となっていくことを祈っています。また、ここに戻ってくるまで新しい企画を模索していきたいと思います。



TAK in KAAT 『pinky』

文：劇団かに座 鳴海悦子

3劇団がオムニバス形式で行った舞台。ステージは立体感があり、ベッドやバスタブなどの配置、転換を行わず同じ背景で全く異なるストーリーを表現していた。

● 劇団820製作所『森が燃える』

荒れ果てた部屋。男が三人。外は猛烈な雪。組織に属する二人の男が、益体もないことをしゃべっている。残る一人は簀巻きになり、無防備な状態でベッドに転がっている。そこに「ママ」と呼ばれる若い女がやってくるストーリー。演出面でライトの使い方が上手く、少し切ないストーリーに生かされていて幻想的だった。

● 劇団スクランブル『Leave!』

その家族にとって大事な事は子孫を残す事。それはとても美しく愛おしく、そして切なく初々しい行為。家族の事は、家族一丸となって・・・！ラブホテルを経営している夫婦に、日常に起きそうな出来事がコミカルに描かれていた。

● 演劇プロデュース『螺旋階段』『静的コンプレックス』

ホテルに集められた六人の男女。それぞれの口からでる「ハセガワ」という名前。しかし誰もその「ハセガワ」のことを知らない。いったい誰なんだ！？親友を殺した真犯人を探しにホテルに突撃してくる男のサスペンシブな話の中にも笑いがたっぷりと含まれた内容であった。

各団体の公演が終わったらそのまま次の団体へと引き継ぐ。その中でも特に気に入ったのは、1つ目の劇団で雪を降らせる演出があった。この後どうするんだろうと思っていたが、次の劇団がホテルの室内に雪を降らせた迷惑な客がいると、ラブホテルの室内清掃に繋げて使われていた。それにより、ただの3つのストーリーではなく時系列が生まれていたのは、とても面白い演出だと思った。

ストーリーは好みで好き嫌いが分かれるだろうが、1つ1つがそんなに長いストーリーではないので、コロコロ変わる背景に、客を飽きさせることなく楽しめたのではないと思う。

劇団紹介

神奈川県演劇連盟に新規に加盟した劇団を紹介致します。

TEAM IMITATION

TEAM IMITATION 寺師涼が2017年12月に旗揚げ。奇数回の公演では既成作品を、偶数回の公演ではオリジナル作品を上演します。主に不条理を題材とすることが多く得意としている。



劇団820製作所



読み方は「はにわせいさくしょ」。2004年に旗揚げをし、東京・横浜を活動の拠点として、演劇の公演を重ねています。キャッチフレーズは「本当はそこにあるおとぎ話」。社会的事象から個人のひそやかな祈りまで、目に見えない場所に生起する感情や物語を丁寧にすくいあげています。2016年には「河のはじまりを探す旅シリーズ」として、古今の戯曲への取り組みを開始。

劇団唐ゼミ☆

劇団唐ゼミ☆は、横浜国立大学の唐十郎のゼミナールを基に発足した劇団です。主に青テント劇場で唐作品を上演しています。私たちは難解で知られる唐戯曲への丹念で正確かつ現代的なアプローチと、場所性を活かす公演の追求を信条として活動しています。テントや野外での上演、あるいは既存建物の演劇空間化にこだわり続けてきました。05年の新国立劇場プロデュース公演以降、現スカイツリー建設地や、池袋西口公園など全国各地でテント公演を行っています。

その他、2011年には、横浜にて唐十郎リサイタルなど4部構成からなる「大唐十郎展」を開催。13年、KAAT神奈川芸術劇場にて『唐版 滝の白糸』を



上演。唐作品以外に美術家・やなぎみわや映画監督・望月六郎との合同公演や完全野外での公演に取り組むなど精力的に活動しています。

僕らの演劇

劇団よこはま喜座

「ジレンマジレンマ」 作：古城十忍、演出：濱田重行
2018年11月30日～12月2日 於：青少年センターHIKARI

劇 団よこはま喜座の舞台を観るのは初めてだった。旧多目的プラザ、現スタジオHIKARIと呼ばれるこの空間をとっても奇抜な発想で演出していた。通常舞台面として使うことの多い楽屋前の空間を客席とし、客席やオペレーション席を設ける柱の方を舞台面としたのだ。中央に大きな柱、そこからVの形で舞台が広がる。始まる前の高揚感を今でも覚えている。



ジレンマジレンマという作品は、ワンツーワークスという東京で活動する劇団が2012年に上演した作品である。社会問題を取り扱うワンツーワークスは過去に在日朝鮮人、死刑の問題、戦場ジャーナリストと若者の貧困を絡めた作品などを上演してきた。ジレンマジレンマの題材はずばり、正義。詳しくいえば震災と、その当事者と、震災により影響を受けた人々の行方。そういったところだろうか。

舞台は取調室。何組かの取り調べが行われている。職務放棄をしたと思われる職員、地元産の米を取り扱わず他県の米を販売している販売者、窃盗事件を起こした大学生。彼らの同僚や関係者、そして取り調べをする警察側。それぞれの登場人物に理由と正義がある。中にはこじつけの正義や自分の中で正当化していてとても理解しがたい正義などがあるが、それでも当人にとっては正義なのだ。そんな正義の主張がぶつかり合う。表裏一体、逆も真なり。片側の正義はもう片側の悪ということ強く考えさせられる内容だった。

人間として、役者として熟成されたご年配の方や、現役高校生など多様な表現者が舞台上に存在する。それぞれの感性、解釈で表現されるのを楽しめた。ある意味バラバラで、でもまとまっていて。それがまさにそれぞれの正義を持つ一人一人の人間が目の前で生きている、ということを感じ付けた。

ワンツーワークスがストップモーションやポップな音楽を使い、エンタメ性を強くしてメッセージを伝えるのに対して、ストレートにお芝居でメッセージを伝えてきた。観た人によって、受け取り方が変わる内容だっただろう。

プラスチックな月 北見大和

演劇プロデュース『螺旋階段』

「二つ目の角を右に」 作／演出：緑慎一郎
2018年12月8日～9日 於：小田原市生涯学習センターけやき

演 劇プロデュース「螺旋階段」の作品には死生観が描かれることが多い（と感じている）人生の折り返しはもう過ぎた年齢になると非常に興味深いテーマである。

会場となる生涯学習センターけやきは小田原駅から少し歩いたところにある。小田原というと観光で行くことが多いのだがこの会場



は観光地とは逆の方向である。それほど都市化されていない町並みはどことなく懐かしい風景で幼少期に戻ったような錯覚さえ覚える。

会場はいわゆる学習センターなので元々はただの広いスペースなのだろうが、客席は過不足無くどの席でも芝居が見やすいように配置されているし、舞台上は病院の軽食スペースが見事に再現されている、とても作り込まれている、これが螺旋階段の魅力の一つである。前説の後、突如客席付近に一人の女性が紛れ込んできて腹痛で倒れる（という体で幕が上がる）。死生観をテーマにした病院内で織りなされる人間模様なのだが決して暗いものではなく、むしろギャグたっぷりな飽きさせない演出である。物語の終盤、主人公に「行きたいなら手術を受けるべき」と伝えた本人が途端に死んでしまう、あまりにもあっけなく死んでしまう、頭が受け付けるのに苦しみ混乱するかもしれない、だが死というものはそういうものだよ、だから僕らはどう生きていかなきゃいけないのかな？と問われている気がした。幼少期を思い出した道のり、現在そしてこれから自分の歩んでいく未来、自分の人生の「二つ目の角を右に」行った時にどんな景色があるのか、そんなことを考えさせられるとてもすがすがしい舞台でした。

10年前に上演した作品の再演だそうで、また10年後もしくはそれ以上先にもし再演されることがあればどういふ作品に変化するのを見てみたい、その時の自身がどんな感想を持つのかとても興味がある。

演劇プロデュース「螺旋階段」二つ目の角を右に、再演された際には是非ご覧いただきたい作品でした。

プラスチックな月 福本ぶう之介

虹の素

「失恋博物館Ⅲ」 作:桜木想香 他、演出:熊手竜久馬
2018年12月28日～29日 於:ラゾーナ川崎プラザソル

虹の素団員である知人からは「自由に動き回りながら観てください」と事前に言われていました。舞台とは座席に座りながら観るのが相場であるが、動きながら観るとは一体どういうことなのだろうか。疑問に感じながら会場を訪れると、なるほど、作品タイトルにもある「博物館」形式であった。会場内の中央にステージ、その周り何ヶ所かにやや小さめのステージが設置され、壁際には過去の作品で使われた小道具等が飾られていた。



開演15分前に入場した際、中央ステージには「案内ピエロ」がパフォーマンスを披露していた。待ち時間でもお客を楽しませようとする心遣いが何とも嬉しい限り。そして今回は複数演目によるオムニバス形式であるため、作品間の「繋ぎ」としてもピエロはとても心地よく楽しませてくれました。

会場内には椅子が数ヶ所置かれているだけであったため、観客のほとんどは立ちながら、もしくは地面にそのまま座りながら観るという状況であった。私はステージ全体が見える壁際で座ることに。途中座り疲れたら立ったり背伸びしたりできるのも、自由度の高い会場構成ならではの。最後までリラックスしながら作品を楽しむことが出来ました。演者にとっては360度すべての角度から観られてしまうため、指先の細かい動きはもちろんのこと、心臓の鼓動や小さな息遣いまでも意識しなければならない状況だったことかと思えます。

各演目は「失恋」を題材にした短編ストーリー。キャストの年齢層が全体的に若いため、懐かしくも甘酸っぱい、青春を思い出させるシーンが多々ありました。若い学生カップルが夜空の星を見ながら語るシーンを微笑ましく感じたり、ヤンキー娘が浮気した彼氏にグーパンチを喰らわしたシーンに大笑いしたり、もう二度と会えないかもしれない人のために「あかいくつ」を作り続けるシーンにホロリとしたり、コメディ・シリアスをふんだんに取り入れた作品となっています。

失恋は別れがツライものですが、素敵な思い出は永遠に残ります。

劇団かに座 永坂貴教

『演劇資料室』をご利用下さい

■神奈川県立青少年センター2階には「演劇資料室」がございます。■



外国や日本の戯曲をはじめ、演劇図書・演劇雑誌が揃えており、無料による貸し出しも行っています(1回につき3冊まで。貸出期間は2週間)。神奈川県内のアマチュア劇団の活動記録や、演劇に関する技術PR誌などもあります。

また、照明・舞台装置・音響効果・演出など、演劇に関する技術的なご相談にもお応え致します。

2018年4月より開室時間が延長されましたので、ぜひ夜間もご利用ください。

神奈川県立青少年センター2階 演劇資料室 〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

【開室時間】毎週火曜～日曜9:00～22:00(貸出は21:30まで)

【休室日】月曜、年末年始(12月28日～1月4日)

【問合せ先】電話:045-263-4400(代表)内線:5301(演劇資料室)

神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』●ガムシャニズム●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座●劇団唐ゼミ☆
- 劇団こゆるぎ座●劇団820製作所●劇団「無題」●劇団よこはま壱座●劇団横濱にゅうくりあ●G/9-Project
- studio salt●TEAM IMITATION●虹の素●プラスチックな月●マシュマロ・ウェーブ●まりこ☆みゅーじあむ
- M.PinK(ミュージカルプロジェクトin神奈川)●ムームー企画●Y.S.ベアフットシアター●横浜小劇場(横浜演劇研究所付属)

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>

DRAMAかながわ[第77号] 発行日:2019年9月30日 発行:神奈川県演劇連盟
編集:・永坂貴教(劇団かに座)・吉浜直樹(劇団横濱にゅうくりあ)・穂村一彦(劇団「無題」)・緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)